

「日清戦争」研究を語る —— 大谷正『日清戦争——近代日本初の対外戦争の実像』 (中公新書 2014 年) によせて ——

大谷 正 菅原 光 前川 亨

(2015 年 2 月 20 日 於神田校舎)

前川：本日は、大谷正先生にお出で頂き、座談会を行なうことと致しました。大谷先生は昨年(2014 年) 6 月に『日清戦争——近代日本初の対外戦争の実像』(中公新書) を上梓されましたが、これがなかなか好評でして、雑誌や新聞に幾つも書評が載ったりもしています(加藤徹・『エコノミスト』2014 年 7 月号、中西寛・『読売新聞』同年 7 月 21 日、飯塚一幸・『赤旗』同年 7 月 27 日、井上寿一・『日本経済新聞』同年 8 月 24 日、山内昌之・『週刊ポスト』同年 8 月号、無署名・『サンデー毎日』同年 8 月号、辻健司・『歴史地理教育』2015 年 1 月号)。ご著書の内容は、日本近代政治史のみならず、広く東アジア近現代の政治・社会にも関連します。ぜひ、それについてお話を伺う機会を作りたいと考え、この企画を立てましたところ、大谷先生からご快諾を頂戴致しました。細かな打ち合わせ無しで自由に、日本政治思想史がご専門の菅原光所員と東アジアの思想史をやっている私とでお話を伺い、またざっくばらんに話し合うとかたちにしようと考えております。よろしくお願い致します。

打ち合わせ無しに、と申しましたが、全く何も無しに「さあ、話しましょう」というのも難しいので、予め大谷先生には、どんなことが話題として考えられるかを纏めたごく簡単なメモをお渡し致しました。それに従う必要は全くないのですが、まずは、「著書を語る」ということで、先生が上記の著書を執筆されるに当たって苦勞された点、その著書で目指したこと、研究史上での位置づけ、或いはそこで書き残したこと、など何でもお話頂いて、そこから次第に日清戦争それ自体へと話題を移していくことにしたらいいのではないかと思います。

執筆のきっかけ

前川：先生が『日清戦争』をお書きになったきっかけは、「あとがき」にもありますように、日清戦争 120 周年の節目の年ということからだったのですね。

大谷：まず、なぜこれを書いたかということからですが、自分から進んで書いたのではなく、言われて書いたんです。中公の白戸直人さんという、なかなか剛腕な(笑) 編集者がいるのですが、その人に呼ばれて、「日清戦争 120 周年だけれども、まだ中公新書には日清戦争に関するものが無いから、書いて下さい」と言われたんです。私は自分の身の丈に余る仕事だと思

ました。私は日清戦争について研究していないわけではないけれども、そのうちのごく僅かな方面について研究しているだけだから、その全体を書くというのはちょっと無理だと思って、最初はお断りしたのです。「でも折角の機会だから」と言われて一つ思い出したのは、佐谷真木人さんという方が日清戦争について書いておられることでした（佐谷『日清戦争——「国民」の誕生』講談社現代新書 2009年）。この方、日本文学関係の人なんですね。最近では日本文学方面でもメディア論が盛んなのですが、佐谷さんも「メディアと戦争」という視点からこの本を書かれたんです。これが大変面白くて、私はとても感心致しました。私もこのテーマに関心があったので、じゃあ歴史の側から書いてみようと思って、プランを出しました。そうしたら、編集者が一言のもとに「駄目だ」と言うんです。「何で駄目なんですか？」と尋ねると、「メディア」では売れません」と（笑）。ともかく「日清戦争の全体を、概説を書いてください」と言われました。

本当だったら断ったほうが良かったのかもしれませんが、引き受けたのは次の事情からです。明治維新史学会編『講座 明治維新』というシリーズがあり、その第五巻に、明治維新史なのに何故だか日清戦争まで入っています。これは明治維新を「長い十九世紀」として捉えるという、そういうコンセプトだそうです。だから、松平定信の寛政の改革（1787～93）から明治維新が始まります。そして終期は、日清戦争（1894～95）と義和団に対する連合出兵（1900～1901）、つまり日本が維新の結果「帝国」化する、そこが明治維新の終期として必要だ、そういう考え方なんです。その中で、私が日清戦争の研究史の整理を担当したので（大谷正「日清戦争」『講座 明治維新』5『立憲制と帝国への道』有志舎 2012年）、その時にたくさん本を読みましたから、それをずっとたどっていけば何とかなるんじゃないかと思って引き受けました。

しかし思いのほか苦勞して、身の丈に合わない仕事は引き受けるものじゃないなと思いました。最初から裏話というのも何ですが、「新書って、こんなふうで作るのか」「編集者・校正者がこんなに手を入れてくるものか」と驚きました。出来上がったものを読んでみて、何か自分が書いたものようでもあるけれど、何か違うような気もする（笑）。全ての新書がこういうふうに作られるとも思いませんが、「こんなふうの新書を作ることもあるのか」「編集者ってこんな役割をするのか」ということを、身をもって体験しました。良い経験でした。

著書の位置づけ

大谷：つぎに、私の著書の研究史上の位置づけは、日本における日清戦争研究の現状を示したものである、ということだと思います。率直にいうと、日清戦争の全体像について特に自分の独自の意見があるわけではありません。或る段階、具体的にいうと 1980年代から 2000年代にかけて、日清戦争研究が大きく進展し、日清戦争像がかなり変わりました。現在の中学・高校

の教科書に書いてある日清戦争像とは違う考え方が出てきました。そこで近年の変化した日清戦争像を紹介しようというのが本書の位置づけです。私自身は、最近ではメディア、とりわけ絵とか写真とかのメディアの歴史に興味を持っていて、グラフィックメディアが日清戦争をどのように描いたかということを中心に書きたかったのですが、それは本書の一つの章（第5章「戦争体験と「国民」の形成」）で簡単に触れただけに留めて、日清戦争全体について現在の研究水準を示すことにしました。それが本書の「目玉」だと思っています。繰り返しますが、私の意見というのは殆どないというのが正直なところでは。

ただ、雑誌や新聞の書評は研究者が書いておられるので、そんなに極端なことは言われませんが、幾つか出たネットの書評——例えば Amazon のレビューなど——を見ると、点数が非常に辛いんです。それは一般の人たちの日清戦争に対するイメージと、本書が提示した日清戦争イメージが違っているからだと思います。それから、これは後で議論になるかも知れませんが、近年の傾向——「日本は立派な国だ、日本がやってきたことは何でも正しい」と言っておけば皆が喜ぶという風潮——が背景にあるのでしょうか。何でもかんでも日本が正しいなんて、「そんなわけないだろう」ということを書いたところ、強い拒否反応が出ました。比較的若い人が書いているんじゃないかと思うんですが、ちょっとびっくりしました。

前川：よくいわれる「ネット右翼」とは違うのかも知れませんが……。

菅原：一般的にイメージされる「ネット右翼」とは違うけれども、そういう傾向を持っている若者たち、まさに現在我々が受け持っているような若者たちでしょうね。本人たちは或る程度歴史に興味を持っていて、それなりに「自分は分かっているぞ」という自負もある。だから書き方としても、単純に「日本は素晴らしかった」というよりは、大谷先生の本は客観的なふうを装ってはいるけれども日本に対して手厳しい側に甘くて、実はバイアスがかかっているんだ、というふうに批判してくる。大谷先生の見方は日本に対する評価が低すぎる、「カミソリ陸奥」の良かった点をちゃんと正しく見ていない、というふうに捉えるんですね。

大谷：私はこれまでそういうネットでの評価に注意したことはなかったんですが、自分の出した本の評価のことはやっぱり気になるので、一か月くらいチラチラと見ていたら、意外に厳しいことを書かれているなど……。

菅原：そんなのを気にするのは馬鹿馬鹿しいとは思っても、そういうことを書かれると嫌なものですよね。もっとも、何も書かれない、何もレビューが出ないというのも淋しいものですが（笑）。

日清戦争研究史——その問題点——

大谷：それから、前川さんのメモにある「従来の研究のどこに不満や物足りなさがあるか」と

いう点について申します。先にお断りしておきますが、これから研究者については、ご存命の方を含めて敬称を一切略してお話します。

日清戦争研究を整理すると大体、戦前の研究、戦後の研究、それから 1980 年代以降の研究と、3 つに分けられます。戦前の研究と申しますと、まず田保橋潔という京城帝国大学の先生だった方の非常に実証的な研究がありました（田保橋『近代日支鮮関係の研究』京城帝国大学法文学部研究調査冊子 3、1930 年、同『日清戦役外交史の研究』東洋文庫 1951 年〔脱稿は 1944 年〕）。それを受けて、信夫清三郎——日本資本主義発達史講座の流れを汲む研究者です——がマルクス主義的な歴史観のもとに日清戦争や日本近代史の研究を行ないました。彼はとても長い研究歴を持つ方ですが、その研究の出発点が日清戦争です（信夫『日清戦争』福田書店 1934 年）。

戦後は二人、有名な先生がいます。中塚明と藤村道生です（中塚『日清戦争の研究』青木書店 1968 年、藤村『日清戦争——東アジア近代史の転換点』岩波新書 1973 年）。このお二人はすごくキッチリと資料を読まれました。戦前、資料が見にくい段階では、田保橋は特定のコネがあるものだから外務省の資料などを見ることが出来て、それで研究が出来た。戦後は、曲りなりにも資料の公開が進んで、憲政資料室が出来たり、外務省資料が外交史料館で公開されたりする中で、利用可能となった資料を徹底的に分析する研究を中塚と藤村が行い、戦後段階の新たな日清戦争像を創りあげた。それが現状の中学・高校の教科書の日清戦争理解に繋がっているのだと思うんです。

このお二人のうち、藤村道生は名古屋大学の出身で信夫清三郎の影響が強いです。一方、中塚明は京都大学の出身で奈良女子大学に長くお勤めでした。この二人、実証主義的研究方法なんですが、戦中に軍国主義教育の中で成長し、戦後になって回心し、戦中の自分を否定して、旧制高校・大学に進み歴史学を学んだこともあって、やはり或種のイデオロギー的な見方が強いです。中塚と藤村は細かい違いはあるにせよ、いずれもマルクス主義的歴史観に影響を受けています。そのこと自体は悪くもなんともない。しかし、研究史を整理していて、色んな問題が出てくるのは信夫清三郎の研究に原因がある、戦後の中塚も藤村もそれに影響を受けたところに問題があるのではないかと思います。

ちょっと話が前後しますが、先ほど申し上げた第三期（1980 年代以降）の研究者たち——檜山幸夫・大澤博明・斎藤聖二・原田敬一など、そして早世した高橋秀直が代表的研究者ですが——は、中塚・藤村の、歴史資料を徹底的に分析するという姿勢に影響を強く受けて、今度は公開された資料を自分たちで一生懸命読んでみた。そうしたら、自分たちが影響を受けた中塚・藤村とは異なった日清戦争像に到達してしまった。その背景には研究者の世代的な問題があると思うんです。軍国少年で戦争を体験した世代と、戦後に生れた戦争を知らない世代とでは、歴

史観が違うのが当然です。そういったことについては『講座 明治維新』に載せた論文に書きましたので、関心のある方は見て頂ければ幸いです。

信夫清三郎に話を戻しますが、彼の研究は問題だったと思います。何が問題かというところ——、彼の『日清戦争』という本は、満洲事変の直後に出版され、すぐ発禁になり、問題にされた箇所を削って『陸奥外交』（叢文閣 1935 年）として再刊しました。これは実は、九州帝大法学部の卒業論文なんですね。大変分厚いものです。当時の大学生は今の学生よりも歳は上で、実質的には現在の大学院生に相当するところですが、それにしても印刷して数百ページにもなる本を卒論で書いたのは驚異的です。信夫清三郎の父は信夫淳平で、外務省職員で国際法学者です。外務省を 50 歳代で退職し、早稲田大学法学部の教授になりました。この方は外務省の歴史関係のものをいろいろ書いています。有名などころでは『小村外交史』——小村寿太郎の条約改正問題を取り扱っています——などを書いていて、戦前には普通の人は見ることの出来ない外務省の資料を信夫淳平は見る事が出来たのです。息子の信夫清三郎も父の書齋で資料を見たのではないのでしょうか。信夫淳平とその 4 人の息子との関係は壮絶なものでした。息子たちは揃いも揃って父親に反抗して、次々に家出し、次男と四男は自殺しました。お父さんは保守的な人だったんでしょ、それに反抗して清三郎は兄の影響を受けてマルクス主義者になりました。そして満洲事変の体験を通して日清戦争論を書き、その中で陸奥宗光外相を賞賛し軍部を批判し、それを「二重外交論」として体系化した。後にご本人も言っているし、弟子の藤村道生も言っているんですが、要するに信夫の本は、言論出版の自由の制限されていた当時は現状の政治動向を批判出来ないから、40 年前の日清戦争を書くことによって間接的に満洲事変における軍部の独走と政治の追随を批判する、というやり方でした（信夫「増補版への序」『増補 日清戦争』南窓社 1970 年〔1934 年刊『日清戦争』の復刊〕1-2 頁、藤村「解説」同書 652 頁、同「信夫史学における日清・日露戦争および第一次世界大戦史研究」『歴史家・信夫清三郎』勁草書房 1994 年 213-217 頁、同「日清戦争百年を迎えて——日本帝国主義の成立再考」『日清戦争前後のアジア政策』岩波書店 1995 年 321 頁）。その批判のための道具がマルクス主義だった。

信夫清三郎が批判の対象にしている歴史学者は田保橋潔です。ただ、よく見ると、信夫の日清戦争研究は、全く同じとまでは言えないが田保橋の本とほぼ同じ事実を、イデオロギー的な評価を変えているという印象があります。彼は、本来は現状批判をしたかったのですが、それが出来ないで、過去に遡って間接的に現状批判する本を書いたということです。そして偶々、お父さんが上記のような立場の人だったから、普通の学者が見ることが出来ない特別な資料にもアクセスすることが出来たのです。

陸奥宗光論

大谷：明治末の 1907 年に、条約改正事業と日清戦争時の困難な外交指導についての陸奥の業績を讃えて、外務省に彼の銅像が建立されました。その後、外務省は代表的な外相として陸奥をもちあげ、そして意外な援軍として、マルクス主義者信夫清三郎が、軍部の独走を止めて困難な日清戦時外交を行った国務の代表者としての陸奥を賞賛しました。丁度世の中は、満洲事変から日中戦争に至る時代で、軍部の独走と政府・議会の追隨が目立った時代でした。その行き着く先が日米開戦ですが、そのしばらく後に、東郷茂徳外相が陸奥の銅像の前に外務省の職員を集めて早期講和の必要性を演説して、まるで陸奥と自分を重ねているようだったという、有名な逸話になるわけです。信夫の研究は、体制を批判する側であった筈なのに、陸奥を持ち上げてしまい、戦後の日清戦争研究もこの傾向をずっと引き継いでしまいました。戦後、藤村も基本的にこの信夫の考え方を引き継いだし、それを批判した中塚にしても、『日清戦争の研究』出版後は陸奥研究に集中して、『蹇蹇録』を岩波文庫で校訂したり（中塚校注『新訂 蹇蹇録——日清戦争外交秘録』岩波文庫 1983 年）、陸奥論を一冊の本にまとめたりしました（中塚『『蹇蹇録』の世界』みすず書房 1992 年）。しかし、1980 年代以降、第三世代の研究者たちはそんなに陸奥にこだわらなくてもいいのではないか。おかしいのは、言論の自由が制限された中で、たまたま信夫が引いた路線を皆が引き継いだことではないか、と考えた……。

前川：プラス評価でもマイナス評価——中塚先生のような——でも、過大評価には違いないということ、ですかね。

大谷：そういうことです。信夫清三郎や藤村道生の本を読むと、陸奥がすごくいい人に見えるんですね。

前川：中塚先生とか高橋秀直先生とか、それから本書で大谷先生も、そうした「陸奥神話」を崩す努力をされる方向だと思っておりました。

大谷：普通に資料を読んでいると、陸奥だって動揺したり間違ったりしているのが見える。上の世代の人もそういう資料を見ている筈なのに、そういうものが見えていなくて、それで陸奥は偉いという評価になってしまう。

同じような問題が小村寿太郎への評価についても言えます。陸奥が日清戦争時の外相、小村が日露戦争時の外相。条約改正についても、陸奥が治外法権撤廃、小村が関税自主権の回復を果たす。だから偉いと評価されますね。でも、最近では、「これ、おかしいんじゃないの？」という人が多いですね。日本の外務大臣はたくさんいたのに、何で陸奥と小村だけそんなに持ち上げるんだ、おかしいじゃないかということです。

前川：そういう見直しの過程ではどうしても評価の振り幅が大きくなる傾向があるのでしょうか。

大谷：戦前からの研究史をみていると、もっと面白い研究テーマが他にあるんじゃないかと

思ったりしますが。

菅原：先生のこの著書を拝見して、陸奥に対する評価がいままでと違うということは分かり易いですが、では、陸奥のどこがそんなに悪かったのかという点が、新書というスペースの制限もあって、それほど詳しく書かれていなかったように思うんです。そこをもう少し具体的に語って頂けますでしょうか。ここに書かれていないことで……。

大谷：陸奥の評価については、私の評価ではなくて、文献として挙げてある何人かの先生方の評価を採りました。まず、先ほど名前が出た高橋秀直、彼の本が基本だと思います。そして、高橋秀直の弟子に当たる大石一男が書いた条約改正に関する優れた著書（大石『条約改正交渉史——一八八七～一八九四』思文閣出版 2008 年）があり、私はそれを引用しました。要するに、陸奥も普通の外務大臣と同じで、成功もするし、失敗もする。そして、陸奥の立場というのは非常に微妙です。幕末に紀州藩を脱藩し、勝海舟の作った海軍操練所に入り、坂本龍馬の海援隊にも参加し、その時期に長州藩の木戸孝允や伊藤博文とも交わった。維新後、新政府の官僚となったが、新政府に反抗した紀州藩出身だったことから志を遂げることができず、西南戦争（1877 年）の際に土佐派の政府転覆計画に関与した疑いで投獄された。それからハッキリとはわからないが、その翌年の、近衛砲兵隊を中心とする兵士が反乱を起こした竹橋事件に関与したと疑われた……。

前川：陸奥は竹橋事件にも関わっていたんですか。

大谷：竹橋事件を描いた『火はわが胸中にあり』（角川書店 1978 年）のなかで、沢地久枝は和歌山出身の岡本柳之助少佐が事件を企画した、彼の目的は獄中にある陸奥の罪を、策略を弄して軽くしようとするものであったとの仮説を提示しています。陸奥が明治 2（1869）年以降、和歌山で津田と一緒にプロシア式の軍を作ります。その時に陸奥の下で働いていた岡本柳之助らが実は竹橋事件の時にも関係している。岡本柳之助は例の閔妃殺害事件（1895 年）の時に中心的に関与した人物でもあるんですね。

そういう事情もあって、陸奥の立場は大変微妙であるのですが、出獄後は急速に権力の階梯を上昇しています。陸奥は議会主義者です。憲法が出来たのに藩閥独裁政権がつづくのはおかしい、選挙で選ばれる国民の代表である衆議院議員と政党が政権に関与すべきだとする立場です。一方で、伊藤博文や井上馨は、彼らも議会主義的なところが強くあるからそれを否定しないわけです。それと同時に、伊藤たちは藩閥独裁権力のトップだから、彼らもまた微妙な立場です。陸奥は政府転覆計画への参加が疑われて、牢屋に入れられたりしたけれども、牢屋から出てくると伊藤や井上の援助で、急速に権力に接近してくる。ところが、陸奥を一番嫌っている明治天皇というやっかいな存在があった。

前川：天皇の陸奥嫌いは相当なものだったそうで……。

大谷：陸奥は、自分は有能だと自負していたから、政府に参加した以上は総理大臣になろうと思って一生懸命だった人です。しかし、それを妨げる要因が幾つかあった。藩閥出身者ではないというハンディ以外にも、一つには彼の身体が弱かったということ。それから、もう一つには自分を嫌っている者が天皇を始めとして権力の中心にいるということ。それで陸奥の立場は困難なもので、常に自分の有能さをアピールして、自分の存在意義を宣伝し続けなければならなかった。

条約改正っていうのはとても困難な課題であって、それを陸奥は達成した、だから陸奥はよくやった、というのが普通の感覚なんだけれども、大石が言うには、いやそうじゃなくて、もう既に大隈や青木の段階で或る程度実現しているんだが、それを陸奥が継承してやったに過ぎない。しかも、上手く出来たのかというと、必ずしも上手く来ていない。政府内部でも、衆議院の反政府の勢力との関係でも、彼は非常に難しい状態にあった。伊藤や井上だったら、失敗しても復活する見込みはあるけれど、陸奥は藩閥の基盤がないので、失敗したら復活できない、終わりです。そういう非常に追い詰められた状態で、日清戦争に踏み切った。彼が何であんなに日清開戦に執着するののかという点ですが、大石によると、一言でいえば、陸奥は条約改正に失敗したから、それでは戦争に訴えるしかなかったということなんです。

菅原：大谷先生もその立場を踏襲しておられますね（本書 49-50 頁）。

大谷：はい。日清戦争は開戦する必要がないのに戦争が始まってしまった不思議な戦争です。開戦の理由を説明するには、大石の説明しかないと思ったので、そう書きました。

矛盾するようですが 私は個人的には陸奥という人が好きです。とても魅力的な人だと思います。自分が権力を握ることによってのみ、日本の民主化が達成出来るという具合に考えて、それに向けて一生懸命にやったんですが、最後に挫折して死んでしまった人です。太陽に向かって飛んでいって、墜落したイカロスを連想します。しかし、だからといって、条約改正で陸奥が成功したとは言えない。陸奥だってかなり失敗した。その失敗した結果が日清開戦への固執だった、と大石が言っているわけです。私は陸奥がいなければ、日本の民主化はあれほど早く進行しなかった面もあるんじゃないか、陸奥は日本の民主化に一定の役割を果たした人で、評価すべき人だと思うんだけど、一方で対外侵略を行う国に日本を転換させた責任者の一人でもある、とも思います。

前川：あの開戦の場面での陸奥の強硬さっていうのは、ちょっと異様な感じがします。

大谷：そうなんですよね。

前川：病的な感じさえするくらいで……。

大谷：大石はハッキリ保身のためだと言ってしまおうですね。そうなのかな、とも思うんです。

前川：ただ、保身のためと言ってしまうと、何か陸奥って人間を小さく見過ぎているかなとい

う気もするんですが。単に自分がのし上がっていくためだけだったのかどうか……。大石先生の師匠の高橋秀直先生もどちらかというたそういう解釈だったように思いますが（高橋『日清戦争への道』東京創元社 1995年 497-498頁）、それだけでもないような気もする。でもそれが何なのかはよく分からない……。

大谷：新書を出版した後で、陸奥の伝記を読んてみたんですよ。明治期の陸奥の同時代人による伝記から近年のものまで。色々な書き方がされていて、違いが分かって面白いんです。明治時代、陸奥の同世代で、彼がまだ生きている時期から、彼が死んだ直後くらいのは、具体的になんです。良いところも悪いところも両方書いている。非難する人と賞賛する人とがあります。ところが、だんだん時代が経って、第二次世界大戦が始まる頃、それから敗戦後になると、陸奥っていうのは批判しちやいけない、触れちやいけないくらい「立派な人」になってしまいます。右も左も誉めます。それはやっぱり変で、明治時代の人と言うように、陸奥は立派な人だけれども間違いも犯したというのが本当のところなんじゃないでしょうか。

こういうことありませんかね。自分が成功すると日本の民主化が成功する、議会主義が進歩する。そうである以上、自分が失敗するわけにいかない、したがって自分を妨害する者を許すわけにはいかない——と、こう考えて、自分と対立する者を排除しようとする。実社会にはよくあるタイプかもしれませんが、そんな人が大学にいと困りますね。

前川：なるほど。大谷先生が仰るように、自分の身近にいとおそらく困る、余りお近づきになりたくないタイプだけれども、伝記などを読むと魅力を感じる人物というのがありますね（笑）。陸奥もそういう人物の一人かも知れません。「カミソリ陸奥」と言われるくらいですから、その自負のとおり、実際頭の切れる人ではあったでしょうし……。

大谷：勉強もよくする人だと思います。

菅原：獄中でベンサムを訳したくらいですからねえ。

福沢諭吉論

前川：さっき、大谷先生は日本の民主化とか議会主義とかいう話をされましたけど、それは福沢諭吉の出した「文明と野蛮の戦い」という図式と或る意味重なるところもあって、日清戦争についても、日本が勝つことはまさに文明が野蛮に勝つことだという意識があったんじゃないか。後からつけた理屈ではなしに、そういう使命感みたいなものがあつたのかな、という気がします。そう考えるとすると、それは陸奥だけの問題ではなくて、伊藤博文とか或いは福沢諭吉とか、そういう明治の政治家や思想家を評価することの難しさそのものなのかなとも思います。福沢諭吉についても、賞賛から罵倒に近い批判まで、評価の対立が激しいですね。日清戦争についてのものとかアジアに関するものを見ると、確かにちょっとひど過ぎるようにも感じ

ます。

大谷：私は福沢のことは分からないから、菅原さんに教えてもらいたいですね。最近、福沢の評価というのか、様々な方面からまちまちのことが言われています。脱亜論とか、それから清国、朝鮮に対する非常に厳しい意見というのは、実は福沢が書いたのではないというふうにする人もいるし、一方で安川寿之輔のように、遡っていくと大体最初の福沢が駄目なんだという極端な議論をする人までいる（安川『福沢諭吉のアジア認識——日本近代史像をとらえ返す』高文研 2000年）。どうなんですかね。

菅原：福沢がどこまで手をいれているか、どこまで自分で書いているかということを生懸命研究しておられる方がいまして、それはそれとして貴重な研究だと思いますが、あまり厳密に考えすぎても、それが思想史研究にとって、全てが有意味だとは限らないという気がします。というのは、福沢が自分で書いていないという場合でも、全く関係の無い人が福沢を自称して書いたというものではないわけですね。例えば、『時事新報』で福沢のものとして載っているものは、福沢の発想に即して書かれていて、そして福沢がチェックしてゴーサインを出している。とすれば、基本的には、それは「福沢（的）」な論考であるとみて差し支えないんじゃないか。こんなふうという大雑把過ぎると批判されるかも知れないですけど。

前川：そのように考えるとすると、福沢の日清戦争評価というのは、まさに先ほど申しました「文明対野蛮の戦い」というので一貫していることになりますよね。

大谷：そうですね。

菅原：朝鮮の内政改革について、福沢は弟子なども含めて期待を寄せていたのに、それが上手くいかなかったということから、「これはもう朝鮮が内発的に改革を進めるのは無理だ」と思ったところが大きかったんでしょうね。それが正しい判断かどうかは別にして、期待を寄せていたのが駄目になったことが、かなりハッキリしたかたちで見えてしまった。それで、方針転換を迫られたということがあるんでしょう。

前川：福沢自身としては、金玉均らいわゆる急進開化派を手助けすることで、朝鮮半島の「文明」化に関与しようとはした。それが実際には朝鮮の内政に干渉し日本の国権拡大を目指したという点では侵略的と言えるけれども、朝鮮の「文明」化を手助けしようとしたという点では連带的と言えないこともない……。

菅原：福沢も、侵略すべきだという議論をしたわけではないという解釈も有力です。福沢が言ったのは、「アジア的な価値観を脱する」ということだけで、それ以上でも以下でもないと考えれば良いはずですよ。それだとつまらないというのなら、つまらないものとして無視すれば良いわけだけど、福沢を余りにも大きな像として描くから、彼が「アジア的な価値観を脱する」と言ったことをイコール「アジアを侵略して攻め滅ぼす」という考えだ、と解釈して批判しようとする

る。こういう過剰反応は、福沢を過大評価する故のことなんだと思います。

前川：そういう点では、陸奥の場合と似たところがあるのかも知れませんね。

伊藤博文論

前川：伊藤博文に対する評価も随分揺れていますよね。揺れているというか、それぞれの研究者によって見方の違いが大きいというか……。

大谷：伊藤博文の研究は、最近いろいろ出ています。その一つが伊藤之雄という京大法学部の先生のもんです。彼は伝記を多く書いていますね。伊藤博文、山県有朋、西園寺公望、明治天皇、そしてその後には昭和天皇まで（伊藤『伊藤博文——近代日本を創った男』講談社 2009年、同『山県有朋——愚直な権力者の生涯』文春文庫 2009年、同『元老西園寺公望——古希からの挑戦』文春文庫 2007年、同『明治天皇——むら雲を吹く秋風にはれそめて』ミネルヴァ書房 2006年、同『昭和天皇伝』文藝春秋 2011年）。彼はよく資料を読むし、充実した間違いのないものを書いているんだとは思いますが。伝記を書く時は、その人物に入れ込まないと書けないってところがありますね。

菅原：そういうところはあるでしょうね。

大谷：伊藤が書く評伝は、主人公の政治的行為を全部肯定しているように感じます。だから、その弟子たち——彼は京大法学部の日本政治史の方で何人もの優れた弟子を育てたんですが——、例えば中公新書で伊藤博文について書いた瀧井という人の方が、客観的なのかな（瀧井一博『伊藤博文——知の政治家』中公新書 2010年）。それにしても、伊藤博文の評価にはいろいろありますね。伊藤博文って人は、責任感が強い人です。何の責任感かっていうと、日本国の最大実力者は自分だという、藩閥のトップとしての自負と責任感です。独裁権力のトップにあると同時に、他方で憲法と議会主義に関してもとても積極的に考えている人です。第二次伊藤内閣を組織していた日清戦争の頃が、彼の政治的なキャリアでいえばピークです。ただし、当時の彼の力を以てしても議会を抑えることは出来なかった。そういう非常に難しい状況の中で、彼は政治権力のトップとして苦勞したんだと思います。

いろいろな言い方があるんだと思いますが、日清戦争を始めたのは誰が悪かったのか、と考えた時に、悪いのは案外、議会で議員を選んだ国民だったんじゃないか。議会は民主主義の一つの拠点です。しかもちょうど当時は、藩閥専制（寡頭制支配）から民主化が進行する過程です。憲法が制定されて、衆議院で選挙が行われて……。

菅原：少なくとも制度的には、民主化が進展してくる……。

大谷：はい。そうした新しい政治状況が誕生したなかで、何が起こったかと言えば、「ねじれ現象」です。憲法上の規定で、行政権を持つ政府と、予算審議権と実質的な立法権を持つ議会与

が対立して、「ねじれ現象」が生じて何も決められない。対立しては何も決められないから、お互いに妥協せざるを得ない。そして不安定な妥協を繰り返しながら民主化が進行する。つまり在野勢力が政権の一角の中に入って行く。藩閥独裁権力側もそれが嫌だから、いろいろなかたちで頑張る。頑張っているうちに、独裁権力の方は、官僚という新しい戦力を作り出す。新しい近代教育の中から生み出されてくる秀才たちを取り込んで頑張る。それには文官もあれば武官もある。——このように民主化が進行していくんですが、その進行していく中で、在野勢力が政府を攻撃する時に、「政府は生ぬるい」という強硬論を主張することが多い。小宮一夫が明らかにしたように、条約改正の時でも、議会勢力とジャーリズムが連合して成立した対外硬派は、政府のような協調主義・漸進主義では駄目だ、条約履行論でやれという（小宮『条約改正と国内政治』吉川弘文館 2001 年）。条約履行論って、考えてみたら、今でいう外国人いじめ、外国人排斥で、それをテコにして相手を追い詰めて条約改正をするという、とんでもない暴論だと思います。

菅原：向こうから改正を要求してくるようにしましょう、というんですね。条約の文言を杓子定規に実行していけば、実は日本にとってではなく、外国にとってかなり困ったことにもなるので、そういう方向に持っていこうと。そうすれば、向こうから改正を求めてくるはずだという……。

大谷：これは暴論だと思うんですけども、そういうことを主張する。それで政府は困って何回も議会を解散する。でも、解散しても政府は選挙に勝てない。じゃあ、条約改正はどうかというと、条約改正を突破しようとするれば、相手があることだから、しかもその相手が強力だから、上手くいかない。伊藤という人は、自分たちの権力を維持することが日本の近代化を進めるのに重要なだから、下野するわけにはいかないと思っている。条約改正問題で追い詰められた上に、1894 年春頃から顕在化した朝鮮問題で、議会の多数勢力が、「政府は生ぬるい」「朝鮮と清に毅然たる態度で臨め」と主張し、さらに 1894 年 6 月 2 日の朝鮮への派兵後は「成果なくして撤兵するなら、政府は責任を取れ」と言うもんだから、伊藤たちは「じゃあ、仕方がないからやるか」とそう思ったんじゃないですかね。民主化過程は内政・外政とも不安定という典型です。

日清戦争における「中央」のコントロール

大谷：ただ、今回著書を書いてみて改めて確認したんですけど、陸奥だとか伊藤だとかが考えている戦争というのは全面戦争ではないんです。朝鮮半島の辺りで局地戦をしながら交渉をする、ということですね。

菅原：まさしく国権の発動としての戦争と考えてますよね。だから、象徴的な戦闘が終わった

ら、後は交渉の場に移っていく。ただ、中には戦争というのは殲滅戦だというような考えの人たちもいるので、そこでの認識のズレをどう考えるかですね。

前川：今、菅原さんがいわれた点と関わると思うのですが、現場と中央とで意思の疎通がどこまで出来ていたのか、よく分からないところがあります。外交官も含めて、中央の伊藤博文だとか陸奥宗光だとかいった人たちと、朝鮮の方で、現場で動いている人たちとの間の関係です。

菅原：ご著書の中でも桂太郎の暴走についての記述がありますね（本書 116－120 頁）。

前川：それがどこまで「暴走」なのか、ということ。それからあの悪名高い朝鮮王宮占拠事件にしても、それがどこまで中央の側の意図が働いてやったことなのか、どこまで現場の判断としてやっていたのか。さっき局地戦という話がありましたけど、その一方で、直隸を衝こうなんて計画もあるわけでしょう。そんな作戦を採ったら、戦線がどんどん拡大していくのは目に見えていますよね。そうなった時に、どこでどう收拾する積りだったのかってことがよく分からない。

大谷：今のお二人の発言はとても重要な問題です。まず現場と中央との違いということですが、これは、今と違って通信手段が未発達ですから、双方に情報の共有という点でズレはあるでしょう。でも、現場は基本的には中央の意思で許される範囲の行動をしていると思うんです。例えば 7 月 23 日の朝鮮王宮占領事件を現場の暴走として説明する研究もかつてはあったのですが、今では、食い違いはあるかも知れないけれども、基本的に、東京の政府——陸奥だとか伊藤だとか、それから当時の大本営だとか——がコントロールしながらやっていたと説明する。

それから、陸軍の全勢力を挙げて直隸（北京・天津地区）を衝くって話ですけど、これについて、私がおかしいと思ったことがあったんですよ。戦争が始まってしまうと、大本営が作られる。当時は参謀総長が陸軍と海軍との両方を統括し、天皇が臨席する大本営の最高幕僚（幕僚長）となるかたちです。陸軍のトップは参謀総長と普通は考えますが、日清戦争当時はそうじゃなくて、陸軍のトップは参謀次長です。参謀総長有栖川宮は陸軍と海軍の両方に関わっていて、明治天皇の代理として、天皇の持つ統帥大権を代行するという立場です。陸軍を代表する参謀次長は川上操六です。この人は柔軟に色んなことを考えている人だと私は信じていました。ところが、先行研究がないので分かる範囲で調べてみたところ、川上って、実は頭が堅いんですね。

菅原：そうですね。先生のご著書を読んだ感じでは、頭が堅いかどうか、無能かどうかというよりは、むしろ手足を縛られたような状態にある印象を受けましたが。

大谷：もちろん、手足を縛られてもいるんですけども、でも彼と彼の幕僚が作戦の全体をコントロールするわけです。それで、じゃあ何を指すかといったら、直隸決戦を指すっていう。これ以外は考えないんです。直隸決戦を指すには、海軍に協力してもらって、持てるだ

けの軍隊を天津と山海関の間に上陸させて、北京の城下で清皇帝の軍隊と決戦して、皇帝を捕まえて条約を結ぶということです。日本と中国とだけで戦争をやっている訳ではなく、周りに東アジアに利害関係を持つ欧米列強がいる中で、直隸決戦など出来る筈なのに、ひたすらそれなんです。で、直隸決戦をやるために、朝鮮の中で兵站線をもっと作れ、軍用電信網を作れと命じ、遼東半島を直隸決戦の準備拠点とするための計画を立てる。それは、川上操六とその盟友であった寺内正毅——この人は西南戦争で右手上腕部を打ち抜かれて、軍人でありながら左手で敬礼しながら出世した人物で、普通だったら退職しなければいけないんだけど、余りにも有能だからその職に留まっていて、とにかく実戦は出来ないが裏方の計算をひたすらやる——、それから陸軍次官で陸軍省を掌握していた児玉源太郎——児玉も実戦と共に人と物資の動員などを行うのが得意なんです——、この3人でコントロールしてやるんです。でも、その有能な3人のやることはというと、最初から決まっている直隸決戦に固執することです。他の要素は考えないで。なんでこう、固定観念で硬直化した発想をするのか……。そうすると、「それじゃいけない」と考える人もいるわけで、伊藤博文も大山巖なんかも「そんなんじゃ駄目だから、早く講和を結べるようにしろ」とか主張する。そして、講和を絡めて、威海衛を攻略する山東作戦と台湾海峡の要衝である澎湖島占領作戦を提起して、消極的な大本营を押し切って実行に移してしまう。

一方で現場の指揮官たち、師団長たちは、戊辰戦争の感覚が抜けないんじゃないですかね。「武士」ですから（笑）。

菅原：そうなんだよなあ（笑）。

大谷：武士っていうのは、或いは武士のエートスっていうのは、人を騙し、抜け駆けする。ウソをつくことは武士道にとっては基本的に良いことで、正直なのは駄目です。幕末の試練を経験した現場の指揮官たちはそういうエートスの持ち主たちですから、言うことをきかない。そういう中で、川上たちは苦勞したことは分かるし、確かに手足を縛られているんだけど、もうちょっと具体的かつ柔軟に外国との関係を見ながら戦争を進めるのかなと思ってたら、そうじゃないんです。

前川：拘束されているという面もあるでしょうけど、川上操六とか杉村濤とか——二人とも、朝鮮王宮占拠事件にも、後の閔妃虐殺にも関与した人物です——、ああいう人たちの行動をみると、1930年代以降——正確には張作霖爆殺事件などのあった1920年代末以降というべきでしょうか——の関東軍などによる一連の謀略的な動きをどうしても想起してしまうんです。或る目的のために他のものが見えなくなって、「暴走」してしまう。しかもその「暴走」する方向たるや殆ど妄想に近いものなので、結局、現実的な判断を超えたところで動いちゃっているんじゃないか。そういう動きを「中央」の方の現実的なプラグマティストが引き戻そうとして

いる。引き戻そうとはしているんだけど、一面、それに乗っかっているところもあって、例えば陸奥にしたって、何とかして清国との開戦に持ち込みたい、開戦に持ち込むためには何か口実を作らなければならない、口実を作るためには、実際に朝鮮でどんな手段を使ってもいいから何か事を起こせ……と、^{そそのか}唆しているところもあるでしょう。「現場」の動きを上手く使っているようで、実はそれに引っ張られているというのは、その後の原型のようにも感じるんですけどね。

大谷：日清戦争の段階のことを昭和の段階と比較するのは面白いと思いますが、慎重を要します。この段階では、最終的には権力のトップ、つまり伊藤のコントロールが効いていました。或いは慎重居士の明治天皇もいました。

これから研究しなければならないのは、私は大山巖と西郷従道だと思っています。大山も西郷も、どちらも薩摩出身ですね。大山というのは、実は山県以上に強硬に清国との開戦を主張した男です。この時期の陸軍は誰が作ったかという、一般には山県というんですが、そうではなくて、実際には大山が作っているんですね。山県は既に軍人というより政治家の比重が強くなり、内相、首相、司法相を歴任します。彼の外交政策は伊藤や井上とほぼ同じ、長州派の対清協調論と見ていい。それに対して、薩派の方は清国と戦争しろと主張し、その代表が大山です。しかし、大山という男は、実際に戦争が始まって現場に行ってみると、現実的な判断が出来る。もう一人面白いのが西郷従道です。この時期の海軍を誰が作ったかといえば、それはやはり西郷従道だと思っています。西郷従道は最初は海軍が専門ではなくて、もともとは陸軍なんです。彼は陸軍と海軍の両方のトップをやっています。彼は戦争が始まると海軍大臣になります。そして陸軍大臣の大山が戦場に行ってしまうと、西郷が陸軍大臣を兼ねることになります。だから名目上、陸軍と海軍との双方のトップなんです。彼は、他の薩摩の連中ほど好戦的ではない。全体の利益をよく考える人で、だから伊藤博文とも関係が深いですね。要するに昭和と違うのは、日清戦争の頃にはそういう現実的な連中がいて、最後には或る範囲で収めちゃう。また収めるだけの力がある。ところが昭和になると、そういうタイプの人がいなくなります。

前川：後の時代との連続と断絶ということについていうと、連続している面もあるけれど、じゃあ全く同じかというところも違うだろうと言いたくなるころも、確かにあります。中塚先生の著書に典型的なように、1930年代の原型が既に日清戦争にあるんだというかたちで遡及させていくと、却って1930年代以降の時代の特徴が捉えにくくなるんじゃないか、という気も一方です。

大谷：中塚の研究は、本質論的ではないでしょうか。明治維新で生まれた天皇制絶対主義の侵略的本質は何ら変わらないという、そういう考えが強いんじゃないか。極めて実証的な研究をなさるんですけども、本質は明治維新から1945年まで余り変わらないということですね。

でも、本質論も大事だけれど、状況によっていろいろな違いがあるということを見ていくことが必要なんじゃないでしょうか。

菅原：思想史研究者も典型的に、全体としてのエートスとかメンタリティとかいうことで、「連続と断絶」を言いたがる場所がありますけれども、現実には、「この側面については連続している」「この側面については断絶している」というふうに個別に見ていくしかないというのが本当のところだと思います。

前川：大山巖とか西郷従道とかいう名前が出ていますが、そういう人たちの軍事思想の系譜というのかな。そういうものを明らかにしようとした研究はあるのでしょうか。

菅原：もちろん政治史の分野で大山や西郷はよく出てきますが、政治思想史の分野でそういう系譜を明らかにしたものはないと思います。政治思想史においては、軍事は未開拓な分野で、私が西周の軍事思想を取り上げたのは、非常に限定的で不十分なものではあります。それを取り上げたということ自体は特殊な例だったと思います（菅原光『西周の政治思想——規律・功利・信』ペリカン社 2009 年）。最近尾原宏之さんが、元老院における議論というところに限定してはいますが、もっと本格的におやりになっています（尾原『軍事と公論——明治元老院の政治思想』慶応義塾大学出版会 2013 年）。ただ、軍事思想とまで言われると、そもそもそんなものがあつたのかという問題にもなってくるでしょうね。軍事思想の系譜といったテーマでの研究は、どちらかと言えば、思想史研究の分野ではなく政治史研究の分野なのかもしれません。政治史的関心からだけ、しかし思想ということも少しは視野に入れてという形で為されるような。

いわゆる「司馬史観」と桂太郎

前川：さきほどの、後代との連続と断絶の問題は、司馬遼太郎のいわゆる「司馬史観」をどう考えるかとも繋がると思うんです。『坂の上の雲』のようなものを捉えて、明治時代を美化していると言われると、司馬遼太郎としては本意ではないだろうという気がします。

大谷：司馬遼太郎って人は、私はよく分かりません。司馬遼太郎については色んな人が様々に論じています。中塚も書いているし（中塚『司馬遼太郎の歴史観——その「朝鮮観」と「明治栄光論」を問う』高文研 2009 年、中塚・安川寿之輔・醍醐聡『NHK ドラマ「坂の上の雲」の歴史認識を問う——日清戦争の虚構と真実』高文研 2010 年）、それ以外にも何冊か本があるんです（中村政則『近現代史をどう見るか——司馬史観を問う』岩波書店 1997 年、同『『坂の上の雲』と司馬史観』岩波書店 2009 年、原田敬一『『坂の上の雲』と日本近現代史』新日本出版社 2011 年など）。司馬遼太郎はなかなか複雑な枠組み、戦略を持って書いています。『坂の上の雲』だけみると明治を美化しているように見える。そうすることによって自分の体験した

第二次世界大戦当時の日本軍の非合理性を批判するという図式ですが、それだけなのかどうか、よく分からないんです。司馬遼太郎を批判しても仕方ないのではないかという気もするんですけどね。司馬遼太郎というのはなかなか難しい人だと思います。

菅原：その問題と多少関わると思うんですが、司馬遼太郎は統帥権に対して非常に批判的ですね。これはもう彼自身の体験に基づくものでしょう。大谷先生はこのご著書の中で、桂太郎の暴走は結局、統帥権が貫徹されていなかったからだということをサラッと書いておられます——真正面から統帥権という概念を論ずるというのではないけれど。桂太郎は統帥権の確立のために中心的に関わった人物ですよ。それこそ竹橋事件などのこともあって、軍人は命令によって以外には絶対に動いてはならないというシンプルな原則があるにもかかわらず、その当の本人がそれから逸脱する。これだって、言ってみれば統帥権干犯問題なわけです。しかし、司馬遼太郎は問題をこういう観点からは見ないんだと思います。桂の暴走を統帥権干犯だというふうには見ない。やはりどうしても昭和期の視点でしか統帥権問題を見ないですよ。大谷先生のこのサラリとした書き方だと、もしかしたらそこは読み飛ばされてしまうかも知れませんが、非常に面白く感じました。

大谷：統帥権って、本当は非常に具体的な問題です。それが、昭和期に入ると抽象化されたかたちで議論されるようになり、政敵を倒すための道具として使われるようになる。軍隊でも政党の間でも。

菅原：戦後もそれがまた、抽象的に議論される……。

大谷：ええ。実際のところはそうじゃないという気がします。

菅原：統帥権というのは、本来、桂の暴走のようなものを許さないためのものの筈ですね。もっとも、当の桂自身がそれを破ってしまっているわけですが。

大谷：桂という人は、自分がやる分には構わないと思っていたんじゃないですか。自分が作ったものだから自分が破るのは問題ない（笑）。

菅原：彼には、自分が破っているという意識はあったんでしょうか。その独断的な行動の結果、かなり立場は危うくなったんですよ。事の重大さに気づいたのはその時になってからなんではないでしょうか。

大谷：そこのところは、千葉功という方が書いた本から引用したんです（千葉『桂太郎——外に帝国主義、内に立憲主義』中公新書 2012年）。桂は、千葉も書いているように、日本最初の近代的な帝国主義者です。それまでの彼の先輩たちは古くさいけど、彼は違う。どんどん変身して行って、日清・日露戦争を体験し、第二次桂内閣では韓国併合を行ない（1910年）、更に満洲問題に関してアメリカとの関係改善を図り、ロシアとは日露協約を結ぶ。国内では、尊敬する先輩の伊藤博文が作った立憲政友会に対抗する政党を作って自分がその頭に座ろうとする

が、志半ばで倒れた。日清戦争時、さっきの暴走の結果、海城で敵中に孤立して「冬籠り」をするんですが、その時の仲間はとても団結力があります。

菅原：補給が途絶えた中でのことですよ。

大谷：そうです。そうした中で、しかも皆なから非難される中で頑張った……。

菅原：武士、戦国武士のイメージですね。

東アジアの中の日清戦争

大谷：話が拡がり過ぎましたので、私がこの著書で書き残した問題は何かという点についてお話ししたいと思います。もっと国際関係について勉強して言及すべきだったのにそれが出来なかったという点は、反省しています。東アジアに関係する国を挙げてみると、イギリス、ロシア、ドイツ、フランス、アメリカなどがあります。そのうち日本では伝統的にイギリスとロシアについては研究がありますが、ドイツ、フランス、アメリカに関しては研究が少ない。最近出て来ているのかも知れませんが、私は読んでいません。そうしたものをもっとちゃんと読んで研究しなくてはいけない。何人かの方に著書を差し上げたところ、その中で批判を受けたのは、「日本のことばかりやっても分からないよ、もっと外国のものもちゃんと勉強するように」というものでした（笑）。それから、当たり前のことですがけれども中国と韓国のことをもっと勉強しなくてはけません。でもなかなか力が及びませんでした。昔の坂野正高の著書とか最近の岡本隆司の著書を読んだけど（坂野『近代中国政治外交史——ヴァスコ・ダ・ガマから五四運動まで』東京大学出版会 1973 年、岡本『属国と自主のあいだ——近代清韓関係と東アジアの命運』名古屋大学出版会 2004 年、同『世界のなかの日清韓関係史——交隣と属国、自主と独立』講談社メチエ 2008 年など）、岡本の本は難し過ぎて十分に消化出来なかったというのが正直なところですよ。

韓国のごことはやっぱり一番気になります。もう少し勉強したいと思ったんですけども……。この方面については、既に趙景達の研究があって、岩波新書にも 2 冊入っています（趙『近代朝鮮と日本』岩波新書 2012 年、同『植民地朝鮮と日本』岩波新書 2013 年）。それらを主に頼りにしましたが、もっと具体的に知りたいと思いました。

また、今から 20 年前、日清戦争 100 周年記念の際に、色んな研究者が参加して日本でも中国でもシンポジウムを開いたんですが、その中で様々なテーマが提起されました。例えばモンゴルと日清戦争とか、満洲人と日清戦争とか、イスラム教徒と日清戦争とか……。平壤の戦いで、清軍の側で一番奮闘したのが左宝贵という人で、彼の戦死でもって清軍の士気が下がって総崩れになりましたが、彼は山東省出身の回族です。中国は古くからの「帝国」ですから、様々な民族がそこに含まれています。

モンゴルとの関係についていいますと、日清戦争 100 周年のシンポジウムの時にモンゴルの研究者も来ていて報告したのですが、そのモンゴルの研究者が日清戦争における日本軍の勝利を賞賛したことに驚きました。モンゴルが中国から離脱して独立するきっかけになったというんです。

前川：ジャムスランさんというモンゴルの研究者が、今仰った内容の報告をして、それに対して韓国の研究者で姜昌一さんという人が猛然と反発したという件ですね。日清戦争 100 周年を記念して出版された本の中に入っています。ひょっとすると今日の話題に上るかと思って持ってきたのですが、中見立夫先生がその件について総括しておられます（中見「近代東アジア国際関係における「宗主権」——《日清戦争国際シンポジウム》におけるジャムスラン報告に寄せて」『日清戦争と東アジア世界の変容 上巻』ゆまに書房 1997 年）。日清戦争が東アジア世界で持っていた複雑な側面がよく表れています。

日清戦争は、中国史の文脈の中では注目度が高まっています。かつての中国近代史の通説的な理解では、アヘン戦争（1840～42 年）がその出発点であって、日清戦争はその後の通過点のように考えられていたんですが、毛沢東的な革命中心史観の後退につれて、もちろんアヘン戦争も重要でないとは言わないけれども、むしろターニングポイントとして決定的に重要だったのは日清戦争じゃないか、という考え方が強くなってきました。岡本先生がよくいうように、「日清戦争は東アジア近代史の分水嶺である」ということです（岡本前掲『属国と自主のあいだ』7 頁、同『李鴻章——東アジアの近代』岩波新書 2011 年 vi 頁）。それに類する表現は以前からあったにせよ、そのことの本当の意味が分かってきたのはせいぜいここ 20 年くらいではないでしょうか。岡本先生は、英、独、仏、中、韓、それにロシア語の資料まで見て、そういうマルチリンガルな、非常に広いコンテキストの中で日清戦争を捉えようとしておられる。日清戦争というのは、それだけ世界史的な意義を持った事件だったということですね。また、そういうコンテキストの中に置かないと日清戦争の意味は分からないとなると、とてもハードルが高くなってしまって……。

さきほどのジャムスラン報告の問題、私はとても興味深いと思ったんです。ジャムスラン氏が主張するには、小国日本が大国である清に勝利することで、日清戦争はモンゴルに希望を与えてくれた。日清戦争は「清朝の支配下に力づくで拘束されていた多くの民族を目覚めさせたという意味で重要な事件であった」（中見前掲論文 268 頁）というわけです。それに対して、姜昌一氏が反論したという、この図式は、これまた日露戦争以降繰り返される図式の雛形じゃないか。現在だってそうで、日本の植民地にされた朝鮮半島や日本による侵略の主要なターゲットにされた中国とそうでない西アジアや南アジアでは、近代日本に対する評価に大きな温度差がありますよね。西アジアや南アジアはヨーロッパに対して怨み骨髄に徹していて、だから孫

文が「大アジア主義講演」（1924年）などで言及しているように、日露戦争で日本がロシアを破ったことに対して彼らはヨーロッパに対するアジアの勝利として大喜びしたのです。モンゴルにとっては、中国の圧力や差別に対する積年の遺恨があるので、それでその中国を破った日本に対する高い評価に繋がる。俗にいう「敵の敵は味方」の感覚です。今でもモンゴルは非常に親日的な国ですよ。

菅原：でも、それは、彼らの側からするとそう見えるというだけのことでね。別に日清戦争を起こした側はモンゴルの解放を目指したわけでも何でもないんだから……。

前川：それはそうです。ただ、視点の違いによって評価が大きく違ってくるということは、日本をアジアの盟主とみなすアジア主義的な思考様式の問題を考える場合には重要じゃないかな。もちろん、私がそれに与するわけではありませんが。

大谷：私は姜とジャムスランのやり取りの現場にいましたが、姜がどこをどう批判したのか、その時はよく分からなかったんです。岡本隆司がよくいう「「自主」と「属国」のあいだ」、清国と朝鮮との関係の問題です。そこについて議論になりました。レッテル貼りをする訳ではありませんが、姜は「民族主義的」な歴史家で、共産主義に反対する立場であると同時に日本に対しても非常に厳しい立場を取る人です。その時には通訳の問題もありました。ジャムスランは実は中国語がよく出来るんです。それで、ジャムスランには中国語で報告してもらおう予定にしていたのですが、そのことをジャムスランにお伝えしたところ、顔色を変えて「私は中国語では一切話さない！」と。それで急遽、モンゴル語の通訳の人をお願いすることになりました。ジャムスランはロシア語も出来るし中国語も出来るんですが、そのシンポジウムの頃はちょうどモンゴルでナショナリズムが高まっていた時期に当たっていたこともあるんでしょうね。非常にその点は厳しい反応で、報告もかなり単純化したものだったので、姜が「そういう側面だけではないだろう」ということで反論したということだったと記憶しています。

韓国における日清戦争理解

大谷：韓国のことをもっと知らなければならぬと先ほど申しましたが、韓国の教科書はどんどん変わっています。私が見たのは日本語に翻訳されたもので、少し古いのですが、日清戦争に関する部分では、「清日戦争」（韓国での日清戦争の呼称）という言葉が出てきません。考えてみると、韓国にとっては当たり前で、韓国の歴史の中で日清戦争というのは他の国の人たちが勝手にやったことでしかありません。自分たちの歴史の中では、「下からの近代化」が東学、「上からの近代化」が開化派、この両方の中で近代化を巡って一生懸命努力がなされた。それを邪魔したのは誰か。日本だ、というわけです。日清戦争の後、いろいろなことがありますが、閔妃が日本人に殺害された後、国王（高宗）がロシアの公使館に逃げ込みます。それから大韓

帝国が成立する（1898年）。そうしたことも、非常に厳しい中で彼らが努力した結果なのだけれども、日本がそれを阻んだのだ、と韓国の教科書は主張しています。それが韓国の立場だと思います。

韓国の大学に留学しておられた考古学の先生からお聞きしたことがあるんですが、韓国の歴史学科の学生では東学を卒業論文や研究のテーマに選ぶ人がかなり多いそうです。日本では東学党の「乱」なんて言われて、それがきっかけで日清戦争が始まるというくらいの認識しかないけれども、韓国の人たちにとってはとても大事なんですね。日清戦争が始まって暫くして、農繁期に入ったので、東学の農民軍は皆な一時農村に帰って農作業をやる。収穫期が終わる10月末から11月に再蜂起して、ソウルの南、忠清道から全羅道にかけて占拠し、さらに慶尚道、京畿道、黄海道などにも拡大して、日本軍の補給線と電信線を破壊したものだから、日本軍は守備隊を派遣して朝鮮政府軍と共同で彼らを殲滅した。これが第二次農民戦争と言われるものです。日本では取り上げられることが稀で、最近になって中塚や井上勝生が紹介している程度ですが（中塚・井上・朴孟洙『東学農民戦争と日本——もう一つの日清戦争』高文研2013年）、韓国では非常に大きく取り上げられるし、歴史学科の学生で研究している人も多くいるんです。韓国の人たちの日清戦争に対する見方は、日本における一般的な認識とは大きく違います。第二次農民戦争を鎮圧する過程で、日本軍はたくさんの朝鮮の農民たちを殺してしまいました。趙景達は、少なくとも3万人くらい、もしかしたら——範囲を広くとれば——5万人くらい殺害したんじゃないかと推定していますが（趙『異端の民衆反乱——東学と甲午農民戦争』岩波書店1998年317頁）、そういう数については、秦郁彦などの日本の研究者は首をかしげるんです。しかし、韓国の人はそうだと考えているし、また事実そうなのかも知れないのですが……。この運動に関連する記念碑が各地にたくさん建っているそうです。中塚や井上はそういったところを歩いて紹介しているんですが（中塚・井上・朴前掲書114-160頁、中塚『現代日本の歴史認識——その自覚せざる欠落を問う』高文研2007年235-243頁）、どういった人がそういった記念碑を建てているのかをみていくと、既に軍事政権がそれを建てていますし、それから民主化が進む過程でも作られています。つまり、韓国には色んな政治的な立場があるけれど、東学農民革命の顕彰という点では一致して記念碑を建てるわけです。こうした状況の中では、日本に対する見方は極めて厳しいものにならざるを得ない。日本を非難する上では、右も左もないわけです。

先ほど話に出たように、開化派を日本は助けようとしていた。それはまさにその通りなのだけれども、韓国では、開化派そのものは高く評価するのに、日清戦争中の甲午・乙未改革の際に開化派が日本に従属していた側面は軽視する傾向があります。戦争が終わった後には、ロシアの公使館に国王が逃げると、日本に協力した開化派は壊滅してしまいます。その結果、伝統

的な特権階層と農民たちの中で日本を支持する人は誰もいない状態になってしまいます。日本は、そんなことをしようと思って戦争を始めたわけではなかった。ところがやってみたら、開戦原因となった朝鮮問題は解決したどころか、日本にとって一層不利な状態になってしまった。

前川：韓国側の側からすると、国民を統合するのにちょうどいいのが、日本批判であることは間違いありませんね。

大谷：韓国では、日清戦争は韓国の様々な近代化・民主化への動きを全て圧殺する目的だったという評価にかなりようがないんです。

※この対談の後、大谷は、2015年3月22日から一週間ほど韓国に行き、先輩の原田敬一とソウルから南下して忠清道と全羅道の東学農民革命の故地を旅しました。当初は、韓国語の出来ない2人が地方を回るの不安でしたが、行ってみると原田の出演する番組をつくるため KBS というテレビ局の車と番組製作のクルーが待っていて、結果的には全行程の行動をともにしました。円光大学の朴孟洙教授の案内で、東学農民革命軍の行動地域の一部を見ただけでしたが、新たな知識とイメージを得ました。新書執筆以前に韓国を調査していれば、第3章第3節の記述は重点の置き方が変わっていたはずでした〔大谷〕。

三国干渉の問題

菅原：日本側からしても、開戦の目的というのは専ら朝鮮問題ですよ。その開戦の目的が達成されたかどうかというシンプルな基準でいえば、日清戦争は失敗なわけですけど、でも、そういう総括ってというのは普通はされませんね。当時だって、勝って沸いて、干渉されてちょっと残念という話ですから。そもそも戦争の目的がどうだったかという点がキチンと検証されないと、結局、戦争中での昂揚感とかナショナリズムでもって、大国中国の上に立った、という話になるんですかね。

前川：下関条約でみる限りは、領土を分捕ることが出来たし、朝鮮の独立を獲得することが出来たし、それなりに「国益」を満足させることは出来たんでしょうが……。

菅原：条約の段階ではそうですが、その後に三国干渉があったりしますから。

大谷：領土要求は遼東半島と台湾の二つ要求したんだけど、三国干渉でそのうちの一つは返さなければならなくなるわけで、「そんなことは分かっていたことじゃないか」という批判が後から出てくることになります。

最近、明治時代の歴史家の本を読むのが好きになりました。明治時代の歴史家は結構ハッキリと書いているんです。現在では、日清戦争に勝ったという評価にはなるんですが、同時代に戦争を体験した人たちからすると——もちろん勝ってよかったとは思ってはいるけれど——誰

のおかげで勝ったのかといえば、伊藤や陸奥や軍隊の誰かさんのお蔭で勝ったんじゃない、天皇陛下が偉いんだとか、我々国民が勇敢にたたかったのがよかったのだとかいうわけです。一方、政府のやったことは余り評判が良くない、伊藤や陸奥は責任をとって早く引っ込め、という論調になってしまう。

前川：伊藤や陸奥に対する厳しい反応というのは、もっとちゃんと国益を守れ、というかたちでの批判なのでしょうか。

大谷：例えば三国干渉についていうと、当時の人の感覚からすれば、列強の干渉があるのは誰でも分かることです。誰でも分かることなのに、下関講和交渉で無理な領土要求をする。それは何故かといえば、遼東半島は陸軍が欲しいと言い、台湾は海軍が欲しいと言う。それで両方が譲らないから、陸奥と伊藤は仕方なしに両方残した。でも、そんなこと、国際的には許されない訳です。三国干渉で済んでよかったくらいのもので、直前までイギリスを含めた4か国の干渉の可能性が高かった。そうなったら日本は終わりでした。

菅原：国際問題より国内問題を優先したことになりますからね。

大谷：そうなんです。分かっていたのかと言えば、伊藤や陸奥は分かっていたんだろうけれども、陸海軍と戦勝に熱狂する国民の要求を拒否出来ない。じゃあ、陸奥や伊藤以外は誰も分かっていたのかといえば、外国の新聞を読む人は誰でも分かっていたわけですよ。

菅原：遼東半島を要求した陸軍だって、分かってなかった筈はありませんね。

大谷：そうですね。

菅原：抑えがきかないということですかね。

大谷：陸奥などは、政治家として他の人よりは優れていたとは思いますが、でもパーフェクトではないわけです。神様のような立場から客観的に判断が出来れば別ですけど、そうでない限り、現実には様々な政治的な駆け引きの中で動かなければならないんだから、どうしても国内状況に引きずられてしまうことを避けられない。陸奥は『蹇蹇録』の中で弁解しています。物わりの悪い連中が沢山いたから仕方なかったんだ、と。

前川：軍部がいうことを聞かないから……みたいな理由でね。

大谷：そうですね。そして民間も悪いと言います。

菅原：或る意味では、それもまた一面では真なんでしょうね。それを無視して突っ走ったらどうなっていたかも、分からない。

メディア、ジャーナリズムの果たした役割

前川：大谷先生がご著書の中で触れておられるメディアやジャーナリズムの問題についていいますと、日清戦争の時期のメディアやジャーナリズムは戦争を後押しするような働きをしてい

ますよね。ナショナリズムを際立たせるというか。メディアやジャーナリズムがこのようなかたちで機能するのは日清戦争が初めてと考えていいわけでしょう。近代における対外戦争の初めが日清戦争なんだから。その戦争の遂行に当たってメディアやジャーナリズムが果たした役割の大きさをどの程度見積もればいいのか。ジャーナリズムがその時期に持ち得ていた比重というか、重さの問題なんですけど。いわゆる世論の形成に寄与し得るくらいの力を持っていたとっていいのでしょうか。

大谷：今のように情報を得るのに幾つもの回路がある訳じゃなくて、基本的には新聞と雑誌しか情報を得る回路はない状況です。通信社が発達していない段階で、情報を得るためには特派員を戦地と広島に派遣しなくてはなりません。派遣することの出来ないところは、他の新聞に掲載された記事を転載する。今と違って、新聞には転載が多いです。中央紙もそうだけれど、地方紙は特にそうですね。私は、これからは地方の新聞のことを研究しようかと思っているんですが、地方では、人々が戦場に行ってしまおうと、その人たちとその地域とを結ぶことが新聞の最も重要な機能になって来ます。地方紙の場合には全体のことよりも、親戚の人とか同じ地域の人が戦場に行ってもなことをやっているのかを知りたい、というところが大きい。地方紙と中央紙と併せて、新聞が結果的に国民を纏めたわけですが、戦争が始まる時に騒いだのは地方紙ではない。地方紙は余り騒いでいないんだけど、中央紙の中でも特定の政治勢力と結びついたものが政府の弱腰を批判した。そして、戦争が始まる時には大したことのなかった新聞が、戦争が終わってみると結構大きな新聞になっていたというところに意味があると思います。新聞という当時のニューメディアを成長させ、日本社会に定着させるうえで、日清戦争は非常に大きな作用を果たしました。これがなかったら、日本の新聞は発達しなかったかも知れない。明治時代の新聞には、もちろん色々な側面がありますが、初期には災害と戦争の情報を伝え、共有するというのが一番大きな機能です。

菅原：重い……。これは本当に重い事実ですね。戦争がなければ新聞、ジャーナリズムは発達しなかったということですから……。

大谷：そうですね。

前川：戦争っていうのは、歴史の中でそういう意味を持っているものなんでしょうか。冷厳な事実として。また、ベネディクト＝アンダーソンがいうように、国家という「想像の共同体」のために身を捧げる「国民」の創出と「出版資本主義」の発達とは密接な相関関係にあるとっていいのでしょうか。

さきほど『時事新報』のことが少し話題になりましたけれど、その読者層がどの辺りであったかというのは分かっているのでしょうか。どういう人がどのくらい読んだか、というようなことは……。

大谷：『時事新報』は、部数は少なくはないです。東京の新聞で何番目かに入ります。高級で、やや値段の高い新聞という位置づけですかね——今と違って、新聞の値段は同じじゃないので。そしてそれはロイターの記事を購入して掲載しています——他のところはなかなか、ロイター電の掲載は出来ないんですけど。ヨーロッパやアメリカの記事も載るし、編集者も福沢門下の人たちが次第に中心になる。他の新聞では、まだ近代的な教育を受けていない新聞記者が多く、まだ漢文読み下し文の世界なんです。そうした中で、だんだんと近代的な教育が導入されてきます。それから、戦争のことを伝えるのに、難しい漢文読み下しの文語調の文体では読者が理解出来ないで、文体も変わってくる。そういう過渡期の時代です。『時事新報』は福沢の指導もあって、わりと近代的な文体を使っています。読者層もレベルが比較的高い。値段の高い新聞ですから、それを購入できる階層の人たちが読者層だったと考えていいでしょうね。

前川：新聞がそれだけ売れるということは、読める人がそれだけいるってことですね。識字率も含めて、国民全体の知識レベルも向上していたということなのでしょう。逆に、それが読めるような人にしか、情報は伝わっていなかったというふうに言ってもよいのでしょうか。

大谷：日清戦争の頃は、兵隊さんはまだそんなに字が読めません。日露戦争の頃になると兵隊も字が読めるんですが、教育史の分野で、就学率の表っていうのがあります。それで考えてみると、小学校教育は4年間ですから、それを体験した人が20歳、徴兵検査を受けて軍隊に入る年齢になるまでに大体10年くらいかかる。そうすると、日清戦争の時の兵隊の就学率というのはそんなに高いレベルじゃない——もちろん、小学校に行かなくても文字が読めた人も幾らかはいたかも知れませんが。戦争が始まると、以前に兵隊だった人、いわゆる予備役や後備役を動員して、そういった人たちも含めて部隊を作ることになります。そういう人たちは更にもう少し前の世代ですから、あまり字は読めなかったでしょう。そうすると、字を読める人が代筆したり、読んでやったりする。それから、新聞といえばもちろん活字ですが、実は声に出して読まれる、音読の世界です。しかも、音読する際に全部、^{ふし}節をつけて読んだと思います。私の父は大正10（1921）年の生まれで、アジア・太平洋戦争へ行った世代で、一応、中学校を卒業しています。今でもよく覚えているんですが、私が小さい頃、寝る前に本を読んでもくれました。山川惣治作『少年ケニア』という、日本の少年がアフリカで活躍するという荒唐無稽な和製ターザン物語でしたが、読むときに、私の父も^{ふし}節をつけていました。日清戦争はそれよりも更に前ですからね。皆な^{ふし}節をつけて読んでいたんでしょうね。

前川：今の感覚で考えてはいけないところですね。

大谷：手紙とかは、今では送り手と受け取り手と一対一の関係ですよ。ところが日清戦争当時の人にとってはそうではなくて、私が受け取った手紙は私のものだから、大きい声を出して皆に聞こえるように読んで、他人に見せて、時々は新聞なんか勝手に掲載して、それで余り

特に文句を言ったりはしなかったんです。

菅原：プライヴァシーとかいった観念がまだないですからね。

大谷：書いた方も多分そうだったでしょう。

菅原：日記だってそうでしたからね。

大谷：皆なに知らせてやるという。そういうことだったんです。

日清戦争と近代化の問題

菅原：日清戦争に日本が「勝った」といえるとして、では何故日本が「勝った」のかというと、それは近代化の度合の差だというのが一般的な回答だと思います。この考え方を非常に安易に受け取ると、日本軍の武器が優れていたからだと考えたくなるけれども、実はそうではなかったということが、このご著書の中ではとても実証的に書かれていますね。では近代化の実態とは何だったかといった場合、福沢諭吉がというような「国民」がいたかどうかという議論になりますが、これでは抽象的過ぎるので、より政治史的な言い方すると、「国民」の在不在というのは、ざっくり言えば、要するに徴兵制がどこまで進められたか、という問題に帰着します。

そこが日本と清との決定的に大きな違いだったというふうには考えられるのではないのでしょうか。

大谷：はい。それが大きな違いだったと思います。そのことを著書の中でも書きましたが（本書 201-204 頁）、それは、松沢裕作の本を読んで、ナルホドと思って、そのまま書いたんです（松沢『町村合併から生まれた近代日本——明治の体験』講談社メチエ 2013 年）。つまり、教育もそうですけども、明治 22(1889)年に市町村というものが出来上がってから明治 27(1894)

年の日清戦争まで僅か 5 年しかない。たった 5 年間で、国民を動員するそういうシステムが出来たわけですね。一方、中国にはそういう国民動員システムがないし、第二次世界大戦の頃でもそれがありません。中国の場合は国の規模が大きいか色々な事情があるんでしょうが、それに対して日本では僅か 5 年でそのようなシステムを作ってしまう。もちろん、近代化という言い方も出来るんでしょうが、むしろ日本社会の特質みたいなものがあるのかも知れません。

菅原：松沢さんのご著書では、江戸時代まではなかったものが、明治に入って僅かの間に町村制が出来て、これが決定的な分岐点になるという。そういう論の組み立てになっているんですが、中央からの指令が渡りはするものの、具体的なことは末端で行っていくというのは、江戸時代の村請制度みたいなものとイメージがかぶるような気がします。つまり、名主層とかそういう人たちが、それ以下の人たちを統括して「お上」の意向に従った何かを下請けするっていうことと言えば、徴兵だって国内債だって、ノウハウは既にあっただのかなと思うんです。松沢さんの枠組みで言ったら、日本は近代化にいち早く成功したから日清戦争で差が出来たという話だけれど、江戸の経験という視点からも理論構成できそうな気がします。

大谷：今のお話をお聞きして、そうかも知れないと思いました。町村の町長や助役や議員など指導者っていうのは、名望家ですからね。

菅原：ええ。そうです。

大谷：江戸時代からの系譜を持つ人たちがこの時期は指導者になっているんですから、確かにそのとおりです。松沢の著書は、余りにもクリアに書かれているので、それに従って書いたんですが、両方の側面があるとすべきだったかも知れません。

菅原：そう考えると、近代化っていうのも新しいものなのか、それとも前の時代からの継続なのか、ということが問題になりますね。

前川：近代化と言った場合、近代と前近代との断絶・不連続を重視する立場——いわゆる大塚史学に代表されるような——と両者の連続を重視する立場とがあります。後者の立場に立つものとして、近代化が成功するかどうかは、実は初発段階というか、近代以前の状態がどうであったかによって決定的に左右されるという見方が、1960年代のアメリカの比較近代化論、例えばエドウィン＝ライシャワーとかシビル＝ブラックなどによって強調されました（ライシャワー『日本近代の新しい見方』講談社現代新書 1965年、ブラック（長幸男訳）「比較近代化の視点」『比較近代化論』未来社 1970年など。）——もちろん、それがどこまで妥当かについては議論のあるところですが。日本の場合には、菅原先生が言われる江戸時代の伝統というか経験というか、そういうものがあるので、明治に入ってからの本格的な近代化に対してはそれが非常に有利に働いたことは間違いありません。それに対して、片や中国の場合には、そのような近代化の前提条件が無いものだから、先ほど大谷先生が言われたように、なかなか近代的な「国民」の創出が出来ないわけです。日清戦争の段階でもそうだし、その後もそうです。孫文はまさに「国民」の創出のために尽力した人で、何とかして強い国軍を作ろうとして努力をしますが、途半ばで倒れてしまう。日中戦争で中国全土が日本軍の侵略に曝されるようになって、そこで漸く「国民」としての一体性が生じてきたと言えるでしょう。日清戦争を大きな契機として、例えば梁啓超などが福沢諭吉の著作から強い影響を受けて、中国における国民形成の必要性を力説し始めたわけで、日清戦争は中国におけるナショナリズムの起点と言っても過言ではない。これに対して、日中戦争はその一応の到達点と位置づけられます。中国の国民形成、ナショナリズムの問題を考えるうえで、日清戦争と日中戦争という二つの戦争がいかに重要だったか、ということです。

今後の日清戦争研究

大谷：最後に一つだけ。日清戦争以来、「欧」と「亜」とか「文明」と「野蛮」とかいう枠組みでの議論がずっと続いてきて、日本は「欧」の側だ「文明」の側だ、中国や朝鮮は遅れた側だ

というふうを考えられてきたのだと思いますが、2015年の今、この時点で見ると、もう韓国や中国はそういう遅れた側ではない。最近、大西裕の『先進国・韓国の憂鬱』という本を読みました（大西『先進国・韓国の憂鬱——少子高齢化、経済格差、グローバル化』中公新書 2014年）。この本は、サントリー学芸賞と樫山純三賞とをダブル受賞したそうですが、これを読むと、もう既に実質購買力などの指標でみると、日本と韓国が接近していることがよく分かります。もちろん、この間、円安ということもあるんでしょうし、日本では伝統的な農村とかを残したのに、韓国ではそれを壊して工業に一本化したとかいうこともあるでしょうが、韓国は我々の遅れた弟ではないんです。暫くすると、向こうの方が抜いていく。韓国も少子高齢化が進んでいるけれども、まだ日本ほどではないですから、まだ発展する余地を残している。日清戦争以来ずっと、近代化のスピードの速い遅いでもって、進んでいる日本と遅れている韓国・中国という図式に乗っかってきたけれど、もうそういう図式は現時点では通用しない。とすると、完全に肩を並べている、或いは追い越していくそういう国をみながら120年前の戦争を議論するという場合、これまでみたいな枠組みはもう通用しなくなっているんじゃないか。中国の場合も、今や巨大化して日本の2倍以上の経済力を持っている——1人当たりの所得ではまた違うんでしょうが。そういう時代に120年前のことを研究する場合、理屈や理念ではなく、現実には何が起こったかを細かく見ていくしかないと思います。中塚や藤村のように、侵略する日本—進んだ日本—欧米列強の手先という側面を強調するのもいいんだけど、むしろ、これまでの議論の中で、日本っていうのもそんなに飛び抜けていた訳じゃない、お互いに対等に競い合っていたんだと、そういうふうに見た方が良いのではないかと思うようになりました。日中関係でみても、元来、対等な関係だったんですから……。

前川：対等どころか、日中交流の歴史を見た場合には、日清戦争以前には中国の方が圧倒的に上ですよ。日本はひたすら学ぶ側、中国はひたすら教える側。文化的資源に関して言うと、日本側の一方的な輸入超過でした。留学に関しても、日本から中国へ留学に行くのであって、その逆は殆どなかった。それが急激に変化するのが日清戦争以後です。1900年代から日本に留学する清国留学生が急増しています。これは日中関係の上で画期的なことでした。

大谷：そういうことを考え合わせると、従来と同じような理念先行の研究じゃなくて、もっと細かく事実を見ていく実証的な研究をしていかないといけない。実証研究でやるべきことはいくらかでもありますから。既に話に出た大山巖や西郷従道についてもそうだし、軍隊についてもそうです。今後のそういう研究に期待したいです。それから、今回は余りお話できなかった琉球の問題と台湾の問題もあります。

前川：琉球問題、とりわけ明治12（1879）年のいわゆる琉球処分に至る一連の過程は日清戦争の前、台湾問題とりわけ台湾民主国の問題は日清戦争の後にあって、現在にまで繋がる大き

な課題を突き付けているように思います。

大谷：そこまで問題が拡がってしまうと、なかなか難しいですね。

前川：そうですね。日清戦争は、とても多くの問題と関わっているので、まだ論じ足りないこともたくさんありますが、既に時間も予定を随分超過していますので、今回はここまでと致したいと思います。長時間ありがとうございました。

座談会を終えて——感想と補足——

前川 亨

私はここ数年、授業で日清戦争前後のことを取り扱っていることもあって、日清戦争に関する研究書を幾つか読んではいたのだが、今回、日清戦争を専門に研究しておられる大谷先生から直接お話を伺う機会を得て、単に研究書を読んでいるだけでは分からないことを知ることができた。

大谷先生は、上記のお話の中で、日清戦争研究史を三期に分けておられる。私は、陸奥宗光評価という点で信夫清三郎氏と藤村道生氏らを一括りとする一方、中塚明氏以降の脱「陸奥神話」的な方向をそれへのアンチテーゼとして捉え、高橋秀直氏や大谷先生などの世代は、基本的にはその中塚氏の路線の延長線上に位置づけられると思っていたので、大谷先生が中塚・藤村両氏の研究を第二世代と位置づけ、ご自身の属する第三世代と第二世代との差異を強調しておられたのが非常に印象に残った。なるほど確かに、中塚氏は「陸奥神話」の否定という点で藤村氏を痛烈に批判しておられるが、実は陸奥を非常に重視したこと——大谷先生自身の言葉をお借りすると「陸奥研究に集中して」いった点——では、藤村氏の立場と共通しているとの見方も成り立つ。そして、中塚氏らの「本質論的」なアプローチに対する違和感が、「等身大の歴史像を」という第三世代の研究者の指向性の背後にあることを看取出来たのは、極めて興味深かった。

この座談会でも日清戦争時期と後代との連続と断絶が議論になっていたが、同じようなことが第二次大戦後の日清戦争研究史についても言えるのかも知れない。いわゆる第三世代は、陸奥や明治時代を美化しないという点では、中塚氏の立場と接点がある。従って、陸奥に関する記述と評価などの局面ではその連続が主に前景に出る。同時に、中塚氏の立場は「陸奥神話」を突き崩し、「司馬史観」を否定しようとする余り、そうした史観の裏返しになっているところがないとはいえない。中塚氏の立場は、司馬が描こうとした「明るい明治」に「明るくない明

治」を対置したものであって、一定の「理念」を前提とした叙述——大谷先生のいわゆる「本質論」——である点では、ベクトルの向きこそ違え、司馬らと同じ立場ともみなし得る。このような或る種の「思い入れ」＝「理念」の優先を拒否する点では第三世代の大谷先生らと第二世代の中塚氏とは断絶がある。

日本のファシズム期の原型を日清戦争時期に、或いは更に遡って明治維新に見出す中塚氏のような立場が出てくるのには、日本ファシズムの特性も関連しているに違いない。かつて西川正雄氏はファシズムの類型を「権威主義的反動」と「擬似革命」とに二分したが（西川「ヒトラーの政權掌握」『思想』512（1967年）、後者の方向を取ったナチス・ドイツとは対照的に、前者の典型というべき日本の場合、1930年代のファシズム期とそれ以前との連続性が顕著に表れることについては丸山真男「超国家主義の論理と心理」『増補版 現代政治の思想と行動』未来社 1956年）などに夙に指摘されているところである。中塚氏の論は、この連続性の側面に焦点をあてたものとみなすことができる。日本のファシズムが過去に遡及する傾向が強い以上、中塚氏の指摘には、個別の事象に関しては当たっているところが多いように思われる。例えば、大谷先生が精力的に解明を進めてこられた問題に、日清戦争中に日本軍がひき起こし、国際的に非難を浴びた旅順虐殺事件がある（大谷「旅順虐殺事件の一考察」『専修法学論集』45（1987年）、同「旅順虐殺事件再考」『ヒストリア』149（1995年）、本書第4章Ⅱ「文明戦争と旅順虐殺事件」122-139頁など）。秦郁彦氏はこの事件と日中戦争の中で発生した1937年の南京事件とに「相似点が多いことにおどろいている」という（秦「旅順虐殺事件——南京虐殺と対比しつつ」『日清戦争と東アジアの変容 下巻』291頁）。しかし、ファシズム期とその前の時代との連続面だけを取り出した、或いはその側面を余りに過大に見積もった判断は議論を単純化してしまい、1930年代の歴史的な特性を却って見失うことになりかねない。確かに日清戦争においても国際法に反する行為、「文明の戦争」の名に値しない行為がなされたことは事実であるが、それにしても、国際法を遵守しようとする意思を持っていた日清戦争段階と、国際法を無視し、或いはそれを超えたところに自らを位置づけようとした1930年代以降の段階との差異を無視するのは一面的であろう。日本が日清戦争から——或いは更に遡って明治維新から——1945年までずっと謀略的で侵略的かつ帝国主義的であったという「本質論」だけで本当に話が済むのであれば、むしろ話は簡単なのであって、今日に至るまで「歴史認識」の問題が取沙汰され続けたりはしないのではないか。そうでないからこそ、明治時代とりわけ日清戦争前後の時代をどのように捉えるかが困難な問題として浮かび上がってくるのではないか。そういう意味でも、これからは「理念」先行ではなく、あくまで史実から出発して等身大の歴史を描くことが重要だと大谷先生の提議には共感するところが大きい。

同時に、とりわけ近代史を取り上げる場合には、好むと好まざるとに関わらず、自らが置か

れている時代状況が反映せざるを得ない。中国の急速な経済発展はその国家的威信を高め、また国民の自覚と自信をも高めた。これが中国のナショナルな意識の高揚に繋がっているわけだが、中国近代史が日本の侵略への抵抗を大きな軸として展開されてきたところからして、中国におけるナショナリズムの高揚は殆ど必然的に日本に対する厳しい態度として現れざるを得ない。同様のことは韓国についても、より強い程度で言い得るに違いない。他方、中国や韓国におけるそのような意識の高まりは、日本側のナショナルな意識をも刺激しないではおかない。かくして東アジア三国におけるナショナリズムのインフレーションが相乗的に充進していくことになる。こうした東アジア情勢に、戦後日本が十分な戦後処理を果たさず、戦前との連続性を清算していないこと——それは「歴史修正主義」として、アメリカやヨーロッパからも（特に、長年にわたり日本の知識人たちと交流してきたロナルド＝ドアー氏やかつて『ジャパン・アズ・ナンバーワン』を著したエズラ＝ヴォーゲル氏ら著名な知日派の歴史学者たちからも！）強い懸念を抱かれるに至っている（2015年5月5日付「日本の歴史家を支持する声明 Open Letter in Support of Historians in Japan」参照）——が相俟って、戦後70年に噴出しているのである。こうした状況下において、朝鮮王宮占拠事件も閔妃暗殺も知らず、それどころか満洲事変や盧溝橋事件すら知らない若者に対して歴史を語るには、いわば「教育的配慮」が、すなわち近代日本の光の部分よりも影の部分を重視することが必要なのではないか。私は、過去の影の部分を語ることを自虐的だとは全く考えないが、百歩譲って仮にそれが自虐的であるとしても、根拠のない傲慢よりはましである。

日清戦争について考えることは、日本近代の歴史全体について思いを巡らす契機となることを、この座談会を通じて私は改めて痛感させられた。

最後に、この座談会に応じて下さった大谷先生と菅原先生に対して改めて御礼申し上げますと共に、大谷先生にはぜひ、今回は実現しなかった日清戦争時期のメディア論、ジャーナリズム論のご出版を実現して下さいよう切望して、この冗長な「あとがき」を終えることにしたい。